

Title	漆 “ J a p a n ” 復活の基盤を探る ―漆に関する 基礎調査―
Author(s)	
Citation	JAIST社会イノベーション・シリーズ, 18
Issue Date	2008-03
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/4870
Rights	
Description	

4 今後の展望 - 漆“Japan”のさらなる発展を目指して

漆器は石川県の文化を象徴する工芸品のひとつであり、日本が世界に誇る文化でもあります。しかし、「原材料調達の困難さ」「消費者の生活様式や嗜好の変化」「海外からの安価な製品の流入」「漆生産を支える後継者の育成機会の不足」など多くの課題に直面していることも事実です。

輪島塗や山中漆器の産地では、漆器の素晴らしさを伝えるため、漆の木の植栽や、江戸・明治時代の優れた漆器技術を再現する取り組み、海外有名ブランドとのコラボレーションや新技術、新用途の開発など、多角的

な取り組みを進めています。食洗機に対応した漆器や傷がつきにくい漆器、かぶれにくい漆の開発などの研究開発も進んでいます。

漆の調達については植栽事業を進めるとともに、国内産の漆を安定供給する仕組みの構築を急ぐ必要があります。そして、日本が世界に誇れる文化として、高い技術力を保有している証として、環境配慮社会における重要な戦略資源として、漆“Japan”を世界に伝えていくことが必要です。



「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」とは？

「21世紀 COE プログラム」とは、日本に世界最高水準の研究教育拠点 (center of excellence) を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材の育成を図るため、平成14年度から文部科学省が実施している事業。「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」は、本学で採択された最初の COE プログラムであり、平成15年度から始まって今年が5年目、すなわち最終年度にあたる。本プログラムでは先端科学技術の研究の場、さらに社会のあらゆる状況において、イノベーションを起こすための知識創造プロセスの研究、そして、それを担う人材としての「知のコーディネータ」「知のクリエータ」育成に取り組んでいる。文理融合を、マテリアルサイエンス研究科 (理系) と知識科学研究科 (広い意味での文系) の連携プロジェクトという形で実践している点が、本 COE の大きな特色である。

JAIST 社会イノベーション・シリーズ No.18

発行 2008年3月

発行所 国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学・科学技術開発戦略センター
〒923-1292 石川県能美市旭台1-1 知識科学研究科棟Ⅱ7階

■本誌に関するご意見、お問い合わせ

TEL: 0761-51-1839 FAX: 0761-51-1767 E-mail: coe-secr@jaist.ac.jp

本誌は、文部科学省21世紀 COE プログラム「知識科学に基づく科学技術の創造と実践」の助成を得て発行しております。

JAIST SOCIAL INNOVATION SERIES

社会イノベーション・シリーズ 18

漆“Japan” 復活の基盤を探る

— 漆に関する基礎調査 —



漆 (うるし) は海外では「Japanese Lacquer」あるいは「Japan」と呼ばれていることをご存知ですか？ 明治時代、漆黒に豪華な装飾を施した日本の漆器が海を渡り、海外の人びとを大いに魅了しました。その煌びやかな漆器は総じて Japan と呼ばれるようになったのです。漆器は日本が世界に誇り得る文化資源のひとつですが、漆器の制作に必要な漆には課題が山積しています。漆の現状について一緒に考えましょう。

FUTURE OF URUSHI JAPAN

1 日本の文化資源・漆（うるし）

漆は海外では「Japanese lacquer」あるいは単純に「Japan」と呼ばれています。明治時代に、日本の優れた美術工芸品として漆器が海外に紹介され、独特の艶を持つ漆黒の漆の上に金銀をふんだんに利用した豪華な装飾を施された調度品が海外の人びとを魅了したからです。私たち日本人と漆との関係はとても古く、約 9000 年前の縄文時代まで遡り、その頃から私たちの生活の一部として漆が活用されてきました。

加賀百万石を擁する石川県では江戸時代に絢爛豪華な漆器を発展させ、今では全国有数の漆器産地となっています。県内に「輪島塗」「山中漆器」「金沢漆器」と 3 つも産地がある県はほかにはありません。しかし、漆器の生産額は

バブル期をピークとして年々減少し、現在では産業の持続可能性が危惧されています。問題は生産額の減少だけなのでしょうか？じつは原材料である漆の調達もままならなくなっているのです。

JAIST では地域再生システム論（JAIST 社会イノベーション・シリーズ No.16 参照）の開講など地域活性化支援に注力してきました。伝統工芸分野でも石川伝統工芸イノベーション養成ユニット事業（同 No.17 参照）を推進しており、漆器産業の基盤である漆についても強い関心を持ってきました。この度、加賀市と連携し「漆に関する基礎調査」（平成 19 年度）を実施しましたので、その結果の一部を紹介しましょう。

2 漆の木と漆

漆は漆科植物内漆属植物を総称するとともに、木から採れる乳白色の樹液のことを指します。樹液である漆は樹木の内部では乳白色ですが、空気に触れると固まり、黒く変色します。

漆の木はアジアを中心に世界各地で 80 属 600 種が植生しています。漆液は主に中国、ベトナム、タイ、ミャンマー、そして日本で生産されています。なかでも日本の漆はウルシオール含有量が最も高く、塗料としての性質が最も優れているとされています。

漆はいったん固まると防水、防虫、防腐、防錆の効果が、酸やアルカリ、アルコールなどにも強く、また高い強度を持つため、これらの性質を利用して古来より様々な工芸品に利用されてきました。また、強い接着性から接着剤としても活用されてきました。

最近では、天然素材のため建築資材に利用してもシックハウス症候群の原因にならない、燃やしても有害物質が排出されないといった利点も漆の魅力として見直されてきています。その他にも薬としての効用の研究も進められています。

漆に触れるとかぶれます。これはウルシオールが原因です。しかし、完全に乾いた漆は触れてもかぶれることはありません。かぶれの度合には個人差があり、何度かかぶれると抗体が出来上がり、次第にかぶれにくくなります。漆器の職人さんも当初はかぶれる人がいましたが、何度も漆を

取り扱っているうちにかぶれなくなっているといえます。



漆かきの跡（輪島市）

江戸時代には様々な製品の塗料として漆が利用されていたため、重要な戦略物資として北海道から九州まで全国で漆の木が植栽され、漆が生産されていました。しかし、現在では国内における漆生産は盛んでなくなり、使用するほとんどの漆を輸入に頼っています。高級な漆器製品や神社・仏閣などの建造物には現在でも日本産の漆を利用していますが、一番外側の工程に利用されていることが多く、海外の漆と調合して利用することも多いのが現状です。

現在、漆の国内生産量は年間約 14,000Kg であり、輸入品が 99%を占めています。国内生産量の約 7割が岩手

県産であり、その他の産地に秋田県、青森県、新潟県、茨城県、福島県、京都府があります。以下では参考事例として国内最大産地である岩手県二戸市浄法寺（以下、浄法寺）の取り組みについて紹介しましょう。



漆樹園（輪島市）

3 浄法寺における取り組み

浄法寺では毎年「漆の植樹祭」を開催し、明治神宮に漆の苗木を奉納するとともに、地域の高校生が授業の一環として漆の木を植樹しています。漆が身近で、かつ文化的なものとして取り扱われているのです。2007 年 11 月に岩手県二戸市浄法寺総合支所を訪れお話を伺いました。

浄法寺での漆生産の歴史は江戸時代まで遡ります。天台寺の太鼓の張替えが起源といわれ、南部藩が漆税の徴収など漆の植栽を奨励していた時期もあります。明治・大正時代には漆が高値で売買され、1年間漆を掻けば家が一軒建つほどの利益を生んだと伝わっています。このような歴史的背景により、江戸、明治時代から続く原木の確保が可能となり、国内最大の産地が形成されていきました。

また、昭和 50 年に岩手県浄法寺漆生産組合が設立されたことで、それまで単独で仕事を行っていた漆職人を組織化することができ、国内で大きなシェアを占める生産量の確保が可能になりました。

この生産組合は漆の卸として流通機能の面で大きな役割を果たしています。漆の採取も山の維持も一人で行なう漆掻き職人をまとめるために組合と行政が協力できる体制



植樹された漆（浄法寺）

が整っていることも、生産を維持するための大きな要因となっているようです。

しかし、浄法寺も他の産地と同様、年々生産額が減少しています。そのため、浄法寺漆をブランドとして確立すべく戦略が策定されています。浄法寺ではブランド戦略の一環として、二戸市（旧浄法寺町）が毎年品評会を運営し、漆液の品質を維持するとともに、漆の採取、品質に関する一定の基準を設け、来年度から認証制度を策定、認知度の向上を目指す活動を行っていく予定です。

浄法寺漆は芸術品、日用品、文化財の修復と幅広く利用され、ブランドとして認知されていますが、漆掻きだけの単独収入では生活が出来ないのが現状です。漆掻き職人のほとんどは兼業農家や年金受給と併せて漆掻きを行なっています。

漆の木の植栽は、組合から漆の苗木を 1 本 170 円で購入し、育てた後に漆掻きを行います。植栽には 1 本当たり販売価格の半額（85 円）の補助金が出ますが、採液を行なう為には植栽から 10～15 年程度を要する上に、生漆は 1 本の木から 180～200ccしか採取できません。浄法寺の漆掻き職人は年間 400 本から 500 本の漆を掻きますが、1年間の粗利は 200 万円弱であるため、採算性は低いといえます。

植栽に関しては、場所を特定して植えているわけではなく、様々な場所に植えています。主に日当たりの良い場所を中心に植え、湿地など水分を多く含む土壌や、他の植物の葉が触れる畑の周囲などを避けた植栽を行なっているとのことでした。また、山の背に植えることも良くないとされています。漆の木は桜の木と同様に、寒暖の差が大きいと良い木が育たないようです。漆の木の栽培にかかる手間として特に大変ものは「下刈り」（下草刈り）や「薬かけ」が挙げられていますが、これは、職人の不足と高齢化という課題があると考えられます。